

2 フライブルク大学と北海道大学医学部との産婦人科・新生児領域における交流の歴史

鈴木¹⁾ 重統・宮下²⁾ 舜一

(一) 第二次世界大戦前

フライブルク大学と日本の医学との交流の歴史は永く、特に病理学のアシヨッフ教室で研鑽をつんだ門下生からは、多くの逸材が輩出しているといわれている。

北海道大学医学部が設立されたのは大正九年(一九二〇)で当時は北海道帝国大学とよばれ、翌年(一九二二)に産婦人科の大野精七がフライブルク大学の病理学教室のアシヨッフ教授のもとに留学した。以後八十年あまりの歴史の間に十人の留学生在が研鑽を積んでいるが、今回は産婦人科・新生児領域における交流について考察を加えたい。

大野のテーマは発癌に関する動物実験であった。鶏を

使ひ、発癌性炭化水素で卵管を通気することで、卵管の癌をつくりだすことに彼は成功した。帰国後一九二四年に大野精七は北海道帝国大学産婦人科の初代教授となる。

同じ一九二四年フライブルク大学のアシヨッフ教授が大野精七教授を札幌に訪ねられ北大で講演された後、宿舎のグラントホテルで「北大は最も新しい帝国大学。北海道のアイヌ村を見学するのは楽しみ」と日記に記している。

教授就任後の大野は、フライブルクでの成果を発展させて、子宮と卵巣を共に摘出しなければならない成熟婦人の胸に卵巣を移植することで、更年期の卵巣欠落症状が阻止されうることが証明した。これは現在のエストロゲン療法が定着するまでの臨床的に意義のある方法であった。

(二) 第二次世界大戦後

北大小児科の吉岡一が昭和三二年(一九五七)ケラー教授のもとに新生児学を学ぶために留学し、同僚のキユ

ンツァー教授と知り合うようになる。キュンツァーは血液学が専門であり、ビタミンK療法の権威でもあった。

ビタミンKは、一九三六年、当時スウェーデンからフライブルク大学に留学していたハイリツヒ・ダムが発見し、のちにノーベル賞をうけている。そのためフライブルク大学はビタミンK発祥の地であり、ビタミンKの研究がきわめて盛んである。

その後の交流の絆を深めたのは、フライブルク新生児科のズートア教授と北大産婦人科の鈴木重統（のち北大医短大部）との交流である。

すなわち、一九七八年頃から世界的に発生した原因不明の新生児・早期乳幼児頭蓋内出血の原因を解明するため、日独の新生児出血に関する研究グループを作り、毎年日独両国でセミナーを開催して検討した。

その結果、母乳栄養児に多発すること（母乳はビタミンKの含量が乏しい）、ビタミンK投与で改善することなどから、ビタミンK欠乏によるものとその病態を解明し、二〇〇〇年までに発祥時の十分の一に減少させることに成功し、その予防法を確立させることも出来た。

具体的に共通している点は出生直後、生後五日目、生後一ヶ月目にビタミンKシロップを児に投与し、生後五日目、一ヶ月後にプロトロンビン値（日本ではヘパラスチンテスト）によってその予後を検索し、スクリーニングしている点にある。

(三) 要 約

フライブルク大学と北大医学部の産婦人科・新生児領域の交流の歴史とその意義をのべた。温故知新は勿論大切であるが、大学の使命は学問の創造にあることから、むしろ温故創新を心がけ二十一世紀の発展を期したい。

¹⁾ (北海道大学医療技術短期大学部)

²⁾ (宮下産婦人科医院)